

<講演抄録>1. 大規模災害事故と歯科警察医及び協力医について(第11回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	山田 文夫
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	6
号	2
ページ	135-135
発行年	1987-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/31262

第11回東北大学歯学会講演抄録

日時：昭和62年6月2日午後1:00～3:30

場所：東北大学歯学部B棟第一講義室

— 一般演題 —

1. 大規模災害事故と歯科警察医及び協力医について

山田文夫（東北大医法医）

昭和60年8月乗員乗客524人乗りの日航ジャンボ機が群馬県山中に墜落し、520名が死亡する大事故を起した。この事故の法医学的問題点については「多数事故死亡者の個人識別について」と題して報告した。この事故の14年前に岩手県雫石上空において、自衛隊機と全日空機が接触し墜落して164名が死亡したが、その検視の反省記録には、「医師のほとんどは外科医で検視縫合では便利であったが、特徴をとらえるうえで不都合であったので検視医のなかに2,3名の歯科医を配置する必要があった」と遺体の取り違えを拡大した原因について記述してあった。さて日航機事故という最悪のケースに個人識別が予想外に成功した原因は大事故の発生を予想して、医師・歯科医師による警察医体制がすでに組織化されていたことであった。しかしさらに大規模な災害に対してはこの組織だけでは対応出来ないため、現実に全医師会、歯科医師会員を対象とした警察協力医という形で組織化されつつある。

その内容は「災害発生時の緊急出動に関する規則」（群馬県歯科医師会）で出動体制が、そして作業活動については、1) 救護班 2) 検視確認班 3) 記録班 4) 連絡班である。

今日、日本の自然的、社会的要因を考えると、地震、火山活動、高速交通網、市街地の高層大規模化、地下街の発達による大事故の発生が懸念されている。そのため、組織化の中で当然法医歯科専門家の協力と指導教育が強く求められている。一方、生存者の多い事故の発生や災害、事件の場合の救護、検視活動についても歯科医師会に組織化を求めている。歯科界においても専門家がプロジェクトチームを組んで大規模事故災害に対して救護、検視活動に対応出来る様検討すると共に、歯科教育の内容にもその対社会活動の充実をもとめられている現況にあることを指摘したい。

2. 宮城県下の一農村地区住民における歯種別歯冠喪失状況について

深瀬啓之，田浦勝彦，島田義弘（予防歯科）

宮城県下一農村地区の40～84歳住民1125名を対象に、歯冠喪失状況について調査した。昭和61年7月の成人総合健康診査時に、第三大臼歯を除く永久歯の歯冠喪失（根面板装着歯とC₄を含む）を診査した。5歳間隔年齢階級で性別、顎別に歯種別歯冠喪失曲線を求め、昭和56年歯科疾患実態調査（56年調査）成績（C₄を含む）と比較検討した。なお、左右側同名歯の歯冠喪失状況は類似していたから合計した。結果は以下の通りである。

1) 各歯種の歯冠喪失曲線がS字状に近いと思われたので、確率積分表から求めた正規分布型への適合度の検定を行なったところ、女性の下顎第二小臼歯を除く各歯種は正規型に適合していると判定された。従って、歯種別歯冠喪失曲線は正規型を示すものと考え、以下の計算を行なった。

2) 歯冠喪失状況の男女差、上下顎差、並びに歯種差を検討するために、X軸を年齢、Y軸を σ 目盛として求めた回帰直線式から歯冠の50%喪失年齢（平均喪失年齢の推定値）と標準偏差を求め、各歯種間の平均喪失年齢の差を統計学的に検討した。(a) 歯種別にみると、下顎第二大臼歯の平均喪失年齢が最も低く、男性60.5歳で、女性55.3歳であった。次いで、小臼歯、切歯の順であり、下顎犬歯は男性78.7歳、女性73.1歳と全歯中最高であった。(b) 各歯種ともに男性の平均喪失年齢は女性より高く、その差は3.3～7.2歳であり、1%以下の危険率で統計学的有意差があった。(c) 顎別の同名歯を比較したところ、男女ともに下顎の切歯と犬歯及び第一小臼歯の平均喪失年齢は上顎より有意に高く、大臼歯においては上顎が下顎より高かった。

3) 本地区成績と56年調査成績を比較したところ、同顎同名歯間の平均喪失年齢は本地区が1.2～5.7歳高く、その差は有意であった。